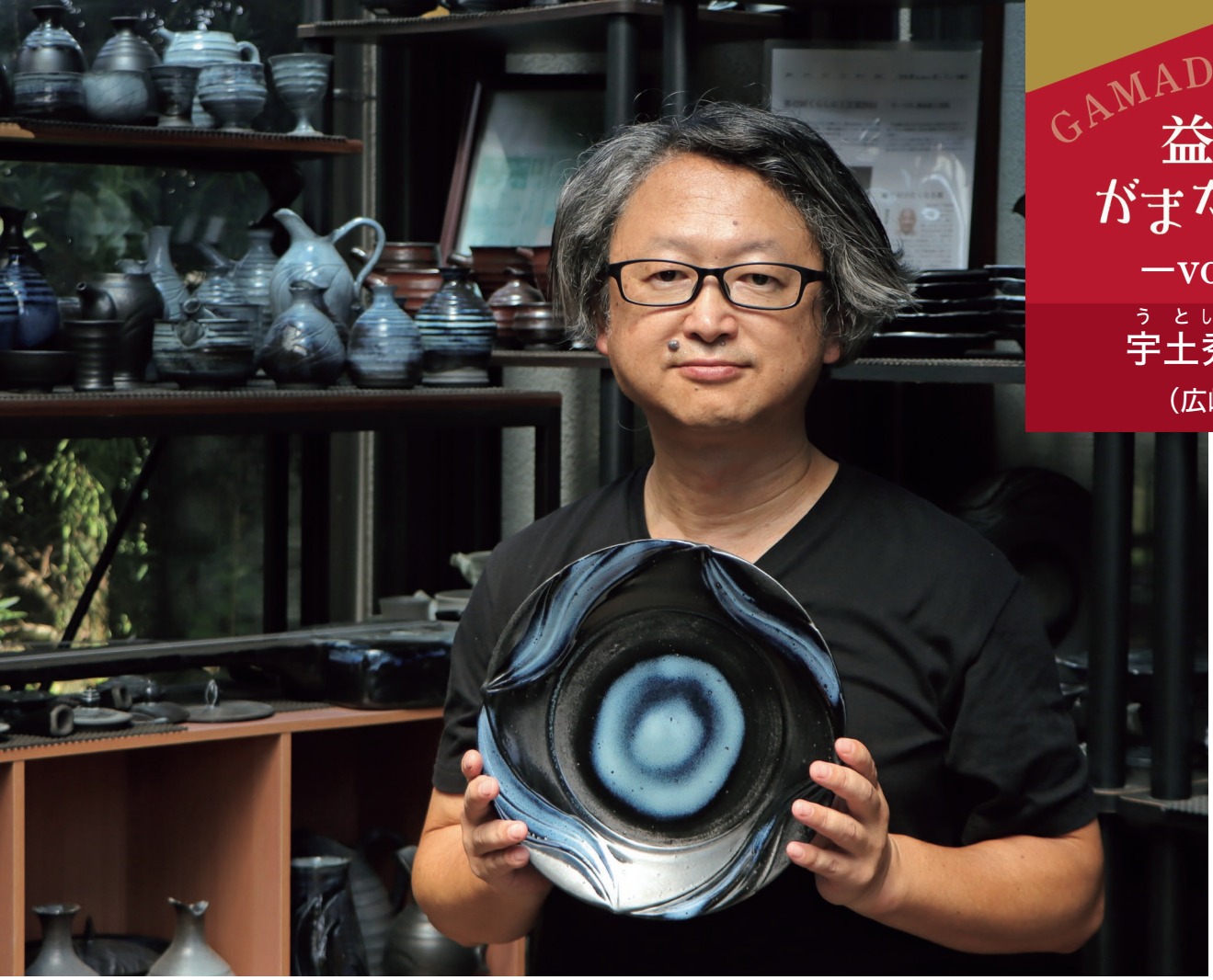

GAMADASHIMON

益城のがまだしもん！

—vol.39—

宇土秀一郎さん

（広崎2町内）

陶芸で沖縄と熊本をつなぐ

独りで飛び込んだ沖縄の焼き物の世界

第42回くらしの工芸展2024で小川審査員奨励賞を受賞した「深海藍組皿」。「光が差す深海の青を表現しました」と話すのが、作者の宇土秀一郎さんです。

30歳の時に趣味で陶芸を始め、教室に通いながら技術を磨いた宇土さんは、39歳で単身、沖縄・読谷村へ。工房の手伝いをしながら沖縄の焼き物の技法などを学び、1年4カ月後に陶房秀星として独立しました。

「何のつてもありませんでしたが、焼き物の形や色に引かれ、沖縄へ向かいました」それが特別なことではないかのように宇土さんは言います。

平成28年2月、益城町の実家に戻り、庭先に工房を建てようと整地を済ませたところで、熊本地震が発生。プレハブの工房に変更して、7月から創作活動を再開し、支援してくれた人や仮設住宅で暮らす人たちに作品を贈りました。

作品と見る人の対話を大切に

美しく、軽く、使いやすい宇土さんの作品。その色や質感を左右するのが、草木の灰に鉱物を混ぜて水で溶かし、鉄や銅などを加えた釉薬です。

宇土さんは、沖縄の青い海や空をイメージした白藍釉、熊本城の瓦のような黒で光が当たると銀色にきらめく黒煌釉など、その土地で見たものから釉薬を作り出します。今回の工芸展には、1つの釉薬に異なる釉薬を吹き付ける深海藍釉・銀河藍釉の新作も並びました。

展覧会などでは、自分が多くを語るより、見る人に作品と対話しイメージを膨らませてもらうことを大切にしているそうです。

「熊本と沖縄をつなぐうつわを作りたい。そして日本各地で個展を開き、益城町から世界中に自分の作品を広めていきたい——」。宇土さんのうつわには、青い情熱が宿っています。

上段写真／深海藍釉の皿
下段写真左から／個性豊かな作品が並ぶ陶房／繊細な手仕事／ジンベエザメなど海の生き物をモチーフとした作品も